

---

# エルフになってみた

青い鴉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

エルフになつてみた

### 【コード】

N5390Y

### 【作者名】

青い鴉

### 【あらすじ】

森でエルフの子供を見かけたので、捕獲してみた。

森でエルフの子供を見かけたので、捕獲してみた。森の中で人間ごときに後れを取ったことが相当悔しいらしく、「いつそ殺せ！」とか言ってきたので、むしろ生かしておくことにする。しかしテープでぐるぐる巻きにするのは美しくないし、紐で縛っても千切って逃げそうだ。どうするか少し思案した後に、僕はエルフの「中に入る」ことに決めた。

魂魄転移（キヤリー・ソウル）の術は、師匠のところに行ったことに覚えたものだ。あの極悪非道残忍卑劣な師匠を単に師匠などと呼んでいいのかどうか、僕にはいまいち自信が無いが、心の中ではそう呼ぶことにしている。しかし間違っても口にはいけない。たぶん聞かれたら容赦無くぶち殺される。

精神を統一し、僕は呪文を紡ぐ。いつやっても慣れない不思議な感じがすると、僕はエルフの中に入っていた。入って初めて、この子供エルフが女だということが判明する。まあ、このくらいは些細なことだ。なにしろ、術の練習のために動物や、カエルやヘビに入ったこともあるのだから。とりあえず僕自身の身体を木陰に隠しておく。

頭の奥からは、子供エルフの「人間に身体を穢された」「もうお嫁に行けない」などという泣き言が聞こえてくる。「このくらいで根を上げないで欲しいな」と僕がエルフ語で言うと、彼女は「人間がエルフ語を話すのか!？」と驚いていた。

「とりあえず里に行こう」と僕が提案すると、「私は仲間を売るようなマネはしない」とツンと澄ましていたから、少し苛めてやりたくなった。僕は自分のエルフとしての感覚に従って歩を進めた。森の奥にエルフの集落があることは知っていたし、エルフだけに分かる道標がそここの樹に記されていたから、僕は雑作も無くエルフの里に到着した。「人間に里が見つかった……なにもかも終わりだ

……」と絶望する声が心地よい。

エルフの里は、一言でいえば樹上の村だった。古い広葉樹の幹から幹へと樹の枝が渡され、その上に精巧に枝が組まれて家の骨格を作っている。エルフの家は、樹を痛めつけないよう、細心の注意が払われている。たとえば釘や鋸かすがいの類は決して使わない。鳥の巣のような家である。その上に、茅葺の屋根が乗っている。

僕はひよひよいと樹を駆け上がり、投げやりな声の導きに従って自分の部屋に向かった。そういえばこのエルフの名前を聞いていないことに気付く。まあ、聞いても答えてくれないだろうが。

「サニティウス。どこに行っていたのだ？」部屋の中には、先客がいた。「兄です」と子供のエルフは胸を張った。「少し見回りをしていました」と僕は嘘を吐く。サニティウスは「助けて兄さん！」と悲痛に叫んだが、エルフ兄が僕の存在に気付くはずもない。

と、このへんでネタばらし。

「見回りの最中、実は人間に捕まってしまいました」「なんだと！」「しかしその人は心優しい御方でしたので、こうして平気で戻って来られたわけです」「人間と話したのか？」「いいえ。言葉は通じませんでした」「そうか……ならば泉で身体を清めてこい。早く穢れを落とさねば成人の儀式はできんぞ」兄は言い捨てて部屋を出ていく。

僕は成人の儀式？と心の中で問う。「それだけは！！どうかそれだけはやめてください！！」と懇願される。成人の儀式はとも神聖なもので決して乱してはならぬ掟があること、人間に見られるくらいなら全員が死を選ぶこと、こんな状況で成人するくらいなら自決する、などと、溢れんばかりの感情を込めて伝えてきたので、僕は白けてしまう。

「いいよ。じゃあこれで終わりにしようじゃあないか。だがこれは大きな『貸し』だぞ。覚えておくがいい。ウオレス・ザ・ウィルレスの名にかけて」

その名を聞いて、サニティウスは卒倒した。そこで僕は術を解い

て、自身の身体へと戻る。どれだけ遠く離れていても、身体に戻る  
ときは一瞬だ。どういう仕組みになっているのか聞いてみたことも  
あるが、師匠は「深く考えるな」と言っていた。

ウォレス・ザ・ウィルレス。無限の時を生きる不死の魔術師。大  
悪魔をも従える冒涇の王。それが僕の師匠の名だ。僕は偶然にも師  
匠に拾われ、魔術と共に育ったのである。もっとも、師匠の使う魔  
法は、強力すぎて僕には扱えないものばかりだったけれど。

そうして僕は森を後にする。人間に里の位置がばれたということ  
で、いまごろエルフの里は大騒ぎになっているはずだ。それとも、  
サニティウスは今回のことを話さずに居られるだろうか。まあ、と  
にかく僕は『貸し』を作った。今度来た時には、エルフの酒でも譲  
ってもらおうと思う。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5390y/>

---

エルフになってみた

2011年11月15日22時18分発行